

茂原市協働のまちづくり推進懇話会 会議概要（会議録）

平成31年3月13日（水）10時～

茂原市役所5階502会議室

1. 開会
2. 協働のまちづくり推進事業の進ちよく状況について
3. 意見交換
4. 閉会

開会	（事務局 風戸）
あいさつ	（市民部次長兼生活課長 田中）
協働のまちづくり推進事業の進ちよく状況について	資料に基づき事務局より報告
意見交換	別紙のとおり

茂原市協働のまちづくり推進懇話会 意見交換

- （関谷座長）いま事務局から今年度の協働のまちづくり推進事業の進ちょく状況についてご報告いただいた。大きく分けると、市民活動団体の認定を踏まえた上で、補助金を交付するなどして応援していく取り組みが一つ目である。すでに 20 団体が認定を受けているとのことである。その数をもっと増やしていけるように、それぞれの活動の基盤がしっかりしていくように、行政としても応援していくというものである。
- 二つ目が、地域まちづくり協議会の認定及び支援である。これは、テーマ別の団体活動というよりも、小学校区など、エリアを意識して、そのエリアの中で団体が横に繋がっていくという仕掛けである。市民活動団体とはいえ、それぞれが縦割り化してしまうという状況がある中で、意識的に学区というエリアを踏まえながら、積極的に横のつながりを生み出していき、いろいろな知恵や行動力を持った方々をつなぎながら、活動していくという取り組みである。現在は、3 つの小学校区で認定を受けた協議会が活動しているとのことである。これも非常に注目されている取り組みの一つである。
- 三つ目が協働提案事業である。そもそも市民活動とは、行政に関係なく、市民活動団体が自主的に、自分たちなりに取り組んでいくものであるが、協働提案事業は、提案者と提案されたテーマを所管する部署がタッグを組みながら、事業を展開していくものである。いろいろな協議を重ねながら、市民と行政が連携して事業を実施するものが、協働提案事業である。今年度は、二つの事業が展開されたとのことであった。
- この後は、委員各位より、いろいろな角度からご質問・ご意見をいただきたい。
- （塚崎委員）とても分かりやすく説明していただいたので、大変良かった。「チャレンジ！オープンガバナンス」の取り組みについて、どのような内容なのか改めて説明していただきたい。「自治会の再活性化」というテーマには、非常に興味がある。
- （事務局 風戸）「オープンデータ」や「ビッグデータ」と呼ばれるものを、行政が積極的に市民側に公表し、データを使いこなせる技術を持った市民側の皆さんが

それを加工して、課題の解決に繋がるようなアイデアを発案したり、スマートフォンのアプリを開発したりしている流れが生じている。

- 「チャレンジ！オープンガバナンス」は、東京大学公共政策大学院が事務局となり、行政側から地域課題とデータを提示して、市民・学生から解決のためのアイデアを募る政策コンテストであり、全国から様々な自治体がエントリーしている。
- 今回は、本市の認定市民活動団体である「シビックテックもばら」が、ラジオ体操に地域ぐるみで取り組むことによって、自治会に参加するハードルを下げるというアイデアを提出した。
- 地域には神社があることが多いので、例えば神社においてラジオ体操会を開催し、自治会に入っているか否かに関わらず、参加を呼びかける。そこで顔を合わせて繋がることにより、顔見知りになり、「自治会で困っていることに力を貸してもらえないか」、「ごみ集積所を皆さんと一緒に掃除してから帰宅しよう」というように、少しずつ輪を広げていくというアイデアである。
- 実際にはアイデアの段階であり、行政側でそれを取り入れて、どのように政策に落とし込んでいくかは、これからの課題であるが、ラジオ体操は、スポーツ振興という意味では、所管は教育委員会体育課になる。自治会に関しては生活課で所管しており、ごみの集積所については環境保全課が所管となる。行政側では部署が分かれているが、市民側で縦割りをなくしてみんなで取り組むということになれば、行政側としても支援する体制を整えていくことになる。結果として、地域コミュニティが再活性化されれば、素晴らしいストーリーになると思う。そこに落とし込むまでの過程を、今後検討していくことになる。
- （関谷座長）「オープンガバナンス」といってもなかなか分かりにくいところはあるが、少し前までは「情報公開」ということが言われ、行政が持っている情報をもっと出してほしいと市民が求めていく流れがあった。これはこれで、行政を活性化させるために注目されたが、今は「情報公開からオープンデータへ」ということが言われている。
- 行政は、一般的にオープンされていないデータを、とても多く持っている。これを、できる限り市民にオープンにしていくことで、そのデータを市民活動団体や民間企業が駆使し、政策に結び付けていくという動きになっている。

- 例えば、高齢者の居場所づくりについて考えるのであれば、居場所となり得る場所がどのようにあるのかという客観的な情報が重要になる。それは、公園であるかもしれないし、公共施設や空き家かもしれない。いろいろなデータがあり得るが、どんどんオープンにし、どう結び付けて、どんなテーマで動きに結び付けていくのかは、未知数である。
- オープンにできる客観的なデータを行政がどんどん公開し、それを市民活動団体や企業が結び付けて解釈し、事業化することを促していくというのがトレンドになっている。その裾野を開くという意味で、東京大学でこのようなコンテストを行ったのだと思う。地方自治体でも関心が高まっており、茂原市でも取り組んでいる。先ほど、子どもたちがタブレットを使っている写真が映し出されたが、いろいろな可能性が開かれている。
- (塚崎委員) 3月24日にシビックテックもばらが開催するイベントとは、直接関係があるのか。
- (事務局 風戸) 3月24日に実施されるのは、「SIM もばら」という、市の財政の仕組みをゲーム形式で実体験するものである。会場を市で提供している。プレイヤーが市の各部長になり、予算を持ち、切り盛りしていく。あれもこれもできればよいが、予算には限りがあり、どこかで取捨選択をしなければならない。そのような場面に、行政は常に迫られている。それをカードゲームにすることによって、ハードルを下げて体験していただくものである。オープンデータとは直接関係がなく、別の取り組みである。
- (塚崎委員) せっかく出たアイデアを、どう実現していくのか。ラジオ体操をどのように推進していくのが重要である。良いアイデアが出たときに、それをやってみようということが、次につながっていくと思う。潰れてしまっただけでは、もったいない。ぜひ自治会の再活性化の一つとして、具体的に展開してほしい。
- (事務局 風戸) 本日、西條委員もご参加いただいているが、自治会長連合会という組織がある。各地区の連合会もあるので、ラジオ体操を活用して自治会をどう再活性化していくかについて、検討してまいりたい。実際に、ラジオ体操に取り組んでいる自治会もある。
- (高信委員) 私の地区では、65歳以上の方が1,000人以上いる。子どもたちが少

なく、高齢者の意見の方が強い。高齢者が、自分たちのことだけではなく、自らの子育ての経験を活かして、地域の子どもたちのことを考えればよいと思う。

- 私の地域では、強制的ではなく、ラジオ体操で身体を動かしたい人が参加している。地域の公園でラジオ体操をして、その後、話をするなどコミュニケーションを図っている。
- 去年から自治会長が代わったが、みんなの意見を聞いてくれる。街路樹の根っこで転んで骨折する人がいるなど、いろいろなことが起きているが、地域には班長がおり、隣組の人たちの話が広がって、自治会として検討してくれる。どうしたら住みやすくなるか、詳細な項目を設け、全世帯を対象としたアンケート調査も行った。市に話を持っていく前に、自分たちでできることは自分たちで解決するようにしている。
- 私自身も、予期しないところで転倒するなど、年齢を重ねたことを実感するようになった。
- 以前は、ゲートボールくらいしかなかったが、最近ではボッチャなど、いろいろなスポーツが体験できるので、高齢者がとても元気になっている。
- リサイクル報償金を、高齢者と子どもたちのためにそれぞれ半分ずつ配分するなど、市役所に頼る前に、まずは自分たちで取り組んでいる。毎日顔を合わせて、日々助け合えば、一人では恥ずかしくて参加できないことも、隣近所で声をかけ合うことで参加できるようになるかもしれない。
- 一部の人が盛り上がり、事業のようになっており、自治会は単なる手伝いになっているという不満の声も聞く。みんながそれぞれ自己を主張するのではなく、できることを楽しくやればよいと思う。そうすれば、世の中で騒がれているような、信じられない出来事もなくなると思う。
- （関谷座長）地域の問題は、すぐ行政に投げってしまうのではなく、自分たちなりに解決策を探るべきであるというご意見だと思う。
- （高信委員）行政には行政のできることをやってもらいたい。地域でできることを、なぜ市役所に持っていくのか疑問である。行政には本来やるべきいろいろな仕事がある。すべてを持って行ってしまえば、行政がパンクしてしまうと思う。
- （関谷座長）その辺りを、どのような役割分担があり得るのか、税金をしっかりとかけなければならない部分と、市民がもっとやれることがたくさんあるのではないかと

と話し合うことが重要である。

- （高信委員）人が生活していく上で当たり前のこと、例えば、ごみが落ちていれば拾うとか、ごみ集積所を当番で清掃するなどについては、自分たちで取り組むべきだと思う。
- （鈴木委員）先ほど、自治会の加入率が下がっているという話があったが、私たちの地域でも同様である。3,500世帯ほどある中で、1,830世帯前後が加入しており、右肩下がりで推移している。その加入世帯の間で、地区民体育祭を開催しているが、その開催によって加入世帯が維持できているかどうかは不明である。
- 先日、役員会を開催したが、隣接する小学校区の子どもたちや、自治会に加入していない世帯の子どもたちについて、地区民体育祭に参加してもらおうということになった。自治会に入ると、こういうことができるのだということを知ってもらい、保護者に伝えてもらえたらと考えている。
- （関谷座長）「組織の加入率」というと、どこも厳しいものがあるが、組織が前面に出過ぎるのではなく、ラジオ体操のような個別具体的な取り組みにもっと焦点を合わせて、そこに参加を募っていくなどすると、そこから組織としてのつながりまでイメージを膨らませていき、参加のハードルを下げ、巻き込んでいくことができると思う。とても大事なご指摘をいただいた。そのようなことが、今後、いろいろな地域で問われることになると思う。
- （高信委員）自治会のアンケートで、「役員の世代交代を希望する」という意見が多かった。今度の総会で話があると思う。高齢者は役員を免除してもらえないかなど、活発な意見があった。役員は、やることが多くて大変である。草刈りも、春と秋の2回行っているが、いつも出てくる人は同じである。出ない人からお金を取ってはどうかという意見もあった。
- （関谷座長）他の皆さんの地域ではどうだろうか。「身体が自由が利かないから草刈りに参加できない」という声が、これから茂原市でも増えてくると思う。高信委員から話があったように、力が出せないのでお金を出すという形の協力もある。
- 自治会単位で草刈りができないので、まちづくり協議会に事業を移して、できる人が草刈りをやっていくというように、どの取り組みをどの単位でやっていくのが望ましいのかを見直すことが、これからどんどん始まっていくと思う。

- それには、地域ベースで話し合い、自分たちなりのやり方を模索していくことが重要である。
- （高信委員）草刈りには、身体が自由が利かなくても、袋を運ぶなど、自分ができることで参加すればよい。知らない人たちと同じことを行うことで、コミュニケーションが図られ、世の中の不満や家族の悩みなど、話し合うことができる。
- 人として生きていく上では、わざわざ国会で会議を開かなくても、身近でできることがある。国には国のことをやってもらいたい。おかしな時代になったと思う。
- （関谷座長）それが大事だから、茂原市の取り組みの裾野を開いていくために、もっと頑張っていかななくてはならないということだと思う。
- （牧委員）認定市民活動団体が、今年 20 団体となり、今後何倍にも増やしていきたいということだが、お話を聞いていて感じているのは、高齢者と現役子育て世代、私を含めた中間層が連携を取るには、時間的な問題と場所的な問題があるということである。
- 議論する場所がない。活動を自主的にできる場所が必要である。知らせるということがまだ足りていないと感じた。個人的なレベルでは、意識が高いので、できることをできる範囲でやればよい。草刈りやゴミの問題も、できる人がいるのに、どこに参加したらよいか分からないのだと思う。それを、市との協働により、分かるような形にしていくのが今後の課題である。
- （事務局 風戸）団体の交流会や市民活動フェスタなど、意識的に横のつながりをつくる場を仕掛けているところであるが、土日に開催しても都合が悪い方がおり、夜間も忙しくてだめな場合がある。すべての皆さんの都合がいい日程というのは難しいので、平日や夜間、土日など、バリエーションを変えながら、多層的に取り組んでまいりたい。そこで何らかのつながりができれば、うまくいくのではないかと思う。
- 市民活動団体とは少し異なるが、各小学校に PTA とは別の組織の「おやじの会」がある。PTA は役割が決まっており、毎年やらなくてはならないことが決まっているが、「おやじの会」はお父さんたちができるときにできることをやっている。草刈りなどは、まさに力を発揮する場所であり、喜んで参加してくれている。
- 例えば、自治会で草刈りできる人がいなくて困っており、一方で、お父さんたちの

中には、力を発揮することができる場所を望んでいる人もいるので、うまく組み合わせることができればよい。

- 今年、各地区の「おやじの会」が集まる「おやじの会サミット」を、ある小学校区のおやじの会が主催して行ったところ、14 小学校のうち 9 校に「おやじの会」があることが判明し、そのうち 8 校のおやじの会が集まった。それぞれの取り組み事例を紹介して、終わった後は懇親会を行った。そのような取り組みも徐々に始まってきている。
- 草刈りに関しては、元気のあるお父さんたちとのつながりをもう少しうまくできたらと考えている。
- （関谷座長）既存の自治会をはじめとする活動母体と、個人化してきている部分もあり、自治会が大事だとはわかっているが、自分の今の生活スタイルに鑑みると、違う形の方が入りやすいという意見もある。まさに、「おやじの会」はその典型であり、そのような入口があったときは、役員などを引き受けることはできないが、力を出すことならば得意であるので、そこに参加してみて、既存の団体でできないことを補完・連携し合うということができるという意味では、非常に意義が大きい。
- 支援していく側からすれば、そのつながりをうまくできるかが問われる。活動する当事者からすれば、いろいろな入口が地域に見えてくると、とても良い。入口が一つしかない、生活環境と照らして参加できないということになり、その人が持っている力がそこで止まってしまう。うまく力を引き出す工夫ができると良い。
- （西條委員）自治会の話がいろいろ出ており、私も自治会長連合会の会長を務めているが、自治会は、やらなければならないという団体ではない。もともとは、向こう三軒両隣で、環境を良くし、仲良く暮らすためのものだった。それが根本である。最近では、周りの人たちが高齢化してきており、会員が集まらない、作業が大変、高齢のため役員を引き受けられないなどの問題が出てきてしまった。昔は、たくさんの方がいたので、そのようなことは問題にならなかった。
- 私の地域では、草刈りを実施すると、自治会員でなくても多くの参加がある。自分の周りの草がきれいになれば、大変気持ちがいいものである。
- 問題は、やはり人口が減っている、会員も減るということである。それをどうこう言っても始まらない。例えば、私の地区では、人口がどんどん減っている。昨

日も、ある担当者と話す機会があったが、向こう三軒両隣といっても、向こう三軒にもう人がいないという話があった。まち自体が、そのようになってしまっている。

- また、私の地域では、まちが大きく二つに分かれている。線路を挟んで西側が「山手」、東側が「海組」と言われている。地区自治会長連合会長が、山側・海側で交互に1年交代していた時期もあった。
- 私の地域では、21の自治会があるが、16自治会で毎年会長が変わっている。残りの5つは1年交代ではないが、2年のところがほとんどであり、たまたま重なると、私以外全員が交代することになる。
- 役員をやりたくない人がほとんどであり、やりたくないのであれば、それで構わないから、周りの人に、自治会ではどのようなことをしているのかを伝えてほしいと話している。地区内で合併した自治会があるが、かつては150世帯ほどあったのが、今では50世帯ほどになってしまっている。
- 変化しているので、変化なりに、それぞれができることをしようと話している。防犯パトロールや草刈りなどを行っているが、作業を通じておしゃべりをすると、仲良くなれる。
- 自治会に団体としての過度の期待をすることは、間違いである。それぞれの地区内での活動にしっかりと取り組むべきである。100歳体操なども、自治会単位でやろうと思ってもできないので、もっと小さな単位で、できる人だけが集まってやればよい。そのような時代であるので、その時代なりの方法でやるしかない。
- 昔は、合併や退会、ごみ置き場の問題などで揉めたこともある。当番を置いて、きちんと整理すれば、よそから来て違法な置き方はしなくなると思う。
- (関谷座長) 組織が前面に出過ぎると、それを維持していくだけでも厳しいし、だからこそ身近にできるところから取り組み、接点を見つけていくというご意見であった。
- (西條委員) 役員をできる人が少なくなってきた。昨日、話を聞いた人は70歳だというので、私は80歳である、70歳で引退とはどういうことだと話した。生涯現役で活躍してもらいたい。頑張りすぎると、身体を壊したりけがをしたりするので、そういうときは、積極的にお見舞いに行き、また頑張ろうと励ましている。
- (鈴木委員) 私の地域では、地域まちづくり協議会が設立されてから30数年にな

る。もちろん自治会も加入しているが、協議会で独自に取り組んでいることも多い。例えば、青少年育成市民会議といっしょに、小学校において、教育フォーラムや作文コンクールを実施している。

- 作文コンクールは、小学校の冬休みに子どもたちが作文を書き、それを審査するものである。全校児童の作品を先生方が審査するのは、とても大変であるが、表彰式には、児童や保護者が席を連ねている。教育フォーラムは、子どもたちが学んだことを発表し、保護者も含めて、地域の方々に来てもらって傍聴してもらうなど、地域と一緒に取り組んでいる。
- (関谷座長)「地域密着人口」という言葉があるが、地域に接点がある世代としては、一つは高齢者、もう一つは子どもがいる世代である。その二つの世代を積極的につないでいくことが、地域の活性化につながっていくという考え方がある。
- 学校を一つの媒介拠点としながら、多世代が交わっていくような動きが出てくると、自ずとそのような動きに乗かっていけるような雰囲気を作り出される。それが大きな呼び水になっていく。大いに期待したいところである。
- もばちやいるの取り組みは、そのような意味では、子どもたちとまちづくりのつながりで、非常に良い媒介をされていると伺っているが、その後の活動としてはいかがか。
- (市場委員) もばちやいるの活動は、自治会等の話とは全くつながらないと思う。私も埼玉県に住んでいた頃は、自治会活動をしていて、楽しかった覚えがある。今は自治会活動が楽しくないという話が続いていて、その差は何だろうと考えていた。やはり、当事者であることが楽しいのではないかと思う。
- 埼玉県にいたときは、50世帯ほどのとても小さな自治会なのに、40くらいの役職があった。子どももまだ小さかったので、子ども会の役員なども務めており、自治会に常に関わっていた。皆さんと顔を合わせる事が多く、どの家も草刈りをきちんとするなど、とてもきれいにしている地域だったので、自分の家だけ汚くできないなと思っていた。
- 今の自治会は、男性社会である。男性がいる家は男性が出て、女性は出なくても良いという感じがある。茂原市に引っ越して2年くらい経ち、自治会の集まりが毎月あるが、私は出ていないので、あまり皆さんの顔を知らない。月1回の集まりの日

には、日曜日でも早く帰らなくてはならないので、面倒である。

- 協働のまちづくり推進事業についても、キーパーソン養成講座やチャレンジ！オーブンガバナンスなどの情報は、誰に伝わっているのか。先ほど、団体の横のつながりを作るようにしているとのことだったが、自治会の話が多いので、私たちの団体はここにいていいのかという気持ちが強くなってしまった。
- 他の市民にも、もっと当事者になってもらいたい。もっと参加できるような告知の仕方を考えてもらいたい。もばちやいるに関しては、学校を通してパンフレットを配ってもらっている。
- 別のことで、NHK から以前電話取材を受けたが、いろいろなところでイベントを開催していて、どのように告知しているのかと聞かれた。一宮町やいすみ市では、自治会の回覧板でチラシを回してもらっているのに、SNS やパソコンを使えない世代の方にも来場してもらっていることを話したら、回覧板がまだ残っている地域があるのかと驚かれた。千葉市や東京のほうなどは、もう回覧板がないのかもしれない。
- 自治会とは違う形のものが生まれてきているので、若い人たちがもっと参加しやすいものになっているのかもしれない。外房地域の他の地区の自治会でも、4月1日から男性が集まると聞く。まさに男性社会だと思う。若い人たちが入っていけない形になっている。世代交代ができないまま、若い人たちが入っていけないから、面倒だと思うようになってしまうのではないか。
- もばちやいるの活動は、自治会活動というよりは、地域の活性化ということで行っているから、あまり繋がらないのかなと感じた。
- (西條委員) 最近の世の中の状況を念頭に置かなければならないと思う。若い人たちは Twitter や Facebook などの SNS を使って、起こった瞬間に情報を得ている。彼らが必要としている情報は、我々と異なる。高齢者向けの情報は、残念ながら SNS などは苦手であるから、どうしても文字で知らせることが最良の手段になってしまう。その区別をしっかりとっておかないと、いくら若い人に自治会に入ってくれと言っても、入ってくれない。紙媒体の情報が不要ないからである。
- 自治会に入ってくれと言っても、仕事で外に出ている、夜しか家にいないなどの理由で断られる。若い人たちは、地域でのコミュニケーションは、同級生などに限ら

れており、しかも、卒業すればみんな市外に出てしまう。

- 自治会に回覧する文書は、眼鏡をいくつもかけなければ見えないようなものではない。中には、紙を回転させないと読めないものもある。
- ほんの些細なことでも、市民の目線になって、読む人のためにちょっと工夫すれば、見てくれる。そういう情報を得るために、自治会に入ってみようかという気持ちにもなると思う。
- 自治会は、万能ではないと思っている。過度の期待は無理である。親睦のための集まりである。
- 今日もそうだが、いろいろな人の意見を聴くと、大変参考になる。ぜひ PR していただきたい。
- （塚崎委員）いろいろ話を伺ってきたが、私はこのような会議に出席できるので、非常に参考になる。
- 「まちびとカフェ」の発端は、昨年度のボランティア参加の「市民活動支援センターのあり方検討委員会」であった。最近、その広がりを感じている。そのようなところでも情報が得られる。
- 来年度、市民活動支援センターが設置されるとのことだが、どこに作るのだろうと疑問に思った。先進的に取り組んでいる事例を掲示したり、各団体の情報をファイリングして誰でも見られるようにしたりするという話も出ているので、そのようなものが置いてあれば、誰でもそこに行って気軽に情報を見ることができるのではないか。場所が必要である。場がなければ、話だけで終わってしまい、もったいないことがたくさんある。
- 予算が厳しいのは承知しているが、予算がなくてもできることはある。1 階の七夕館に、市民活動支援センターを同居させてはもらえないか。そこにいろいろな掲示やファイリングがあり、机があれば、市民活動団体の人たちが自由に打ち合わせできるし、他のグループがいれば、自然な交流もできる。そこに誰かスタッフがいなくてはいけないということではない。場があれば、市民が自主的に利用し、必要に応じて、生活課の担当に相談したり、連携を取ったりすればよい。
- 来年度設置される市民活動支援センターの場所が、先ほどから話が出ている「つなぐ」ためのツールの一つになると思う。

- （関谷座長）市民活動団体という活動の仕方と、まちづくり協議会や自治会のような団体と、いろいろなスタイルがあるが、それぞれがどのような形で取り組んでいるのか、お互いに知らないということがあると思う。それが、新たな担い手の発掘や育成に繋がっていないという実情がある。
- スタイルが違って、場合によっては棲み分けが必要だが、裏を返せば、全部をくくる必要はない。お互いがどんな形でやっているのかを知らないことには、部分連携も、情報伝達や共有も、すそ野が広がっていかない。そのあたりをどうしていくのが、茂原市のいろいろな活動の共通した課題になってくると思う。
- 市民活動支援センターは、どんなイメージで今後展開していくのか。
- （事務局 風戸）現在は、生活課に市民活動支援係を置いているが、係を室に格上げし、さらなる支援の充実に努めようと考えている。
- 塚崎委員から、「場」についての発言があったが、今後検討してまいりたい。提案のあった場所は、現在、別の課が使用している。交渉するにあたっては、利用されているという実績が必要になると思う。団体の皆さん、自治会の皆さんに気軽に足を運んでいただき、情報を得ることができたり、対話したり、必要に応じて職員が調整させていただくようにしたい。
- 今のところは、生活課の前のスペースを活用しようと考えているが、提案のあった箇所についても検討してまいりたい。
- （塚崎委員）場所は、市民コーナーか。
- （事務局 風戸）市民コーナーではなく、生活課の前のスペースである。
- （塚崎委員）エスカレーターを上った場所では、あまりにも目立ちすぎる。その場所では、いろいろな話をして、リラックスして情報交換するイメージが沸かない。
- まちびとカフェが着実に開催されてきたことが、実績であると思う。そこから、市民活動フェスタを開催しようという話になったり、情報交換の会を設けようということになったりもした。貴重な積み上げであるので、市がもう少し評価してほしい。
- 市民コーナーは、いろいろな人が利用する。冬は寒く、夏は暑い。市民の情報を得られるところと隣り合わせに、七夕まつりの飾りがあっても、同居できると思う。
- 語ることができる場所があれば、そこに集まりやすい。利用した人たちが、センターに申し出て、自分たちが利用した記録を残し、それを積み上げていけばよい。や

はり、「場」というのは大事である。

- 話は違うが、いろいろな地域に「場」を作ろうということになっている。いま、それぞれが孤立しており、何とかしなくてはという声が多い。場が作られると、課題はすべて解決されると思う。継続してやっていると、おしゃべりをしなかった人が、積極的にみんなの前で語るようになる。それは、場があったからである。
- 今の段階で、市民の皆さんにもっと活躍してもらいたいと思うのであれば、場所は早急に検討してもらいたい。新しくなくても、既にある机で構わない。場をきちんと固めてもらいたい。
- (西條委員) 2階の市民コーナーにスペースがある。そこに集まればよいのではないか。
- (塚崎委員) 市民コーナーは、いろいろな人が利用するようになっているので、もう少し落ち着いた場所で、団体の情報を収めたファイルがあり、掲示がいつも見られるような情報交換のできる場所が望ましい。市役所に用事があったときに、必ず寄って見ることができるし、誰かいるかもしれないから覗いていこうということになる。そのような意識付けが大事である。
- 市民コーナーは、男女共同参画の定例会など、いろいろな人たちが利用している。その中の一つとして考えてやっていくのか、それとも、せっかくセンターについて1年間かけて検討してきたので、固定した場所を用意するのかである。
- (西條会長) 場所は使いようであると思う。各地域で、集まりやすい場があれば、そこにすればよい。全体的な話をするのであれば、市庁舎が最も適している。
- (塚崎委員) 庁内を巡って歩いて、七夕館のスペースがいいのではないかと考えた。場所がもったいないので、ぜひ活用して、もっと利用するようになればいいのではないか。
- (関谷座長) そのような場は、間違いなく必要だと思う。先ほど申し上げたように、いろいろなスタイルで違う活動をされている方々がいるので、お互いに情報を知ることができる出会いの場として、やりとりをして、お互いを理解しようというようになっていくと、いろいろな意味での偏見や固定観念がまだあるであろうから、それを少しでも払拭していく、そのきっかけになればよい。
- 近年の媒介拠点は、そのような方向性を目指している。放置してしまうと、それぞ

れが内に閉じてしまう。そうではなく、少しでも引っ張り出すために、そのような場があるとよいと思う。

- さらに申し上げておこならば、そのような場があることによって、どんな場所でもどんな力が必要とされているのかが、もっと市民に見えてくるようになると、とても大きい。例えば、先ほど子ども食堂の話があったが、運営していくと、人やお金、食材など、いろいろな課題が出てくると思う。そのようなときに、ある地域では農家と連携したり、市民農園で余った野菜など、お金ではなく物で連携したり、寄附したりという動きと結びついてくると、また違った可能性が見えてくる。
- 子ども食堂の担い手にしても、コアメンバーがずっとという訳にはいかないので、月に1回や2回でいいから携わってくれる人を探しているという呼びかけであれば、まったく反応が変わってくる。そのように、どんな場所でもどんな人や物が必要とされているのかという情報が幅広く発信されていけば、一般市民の方々が、これなら提供できるという気付きにもなる。また、他の市民活動団体が、この分野なら協力できるというマッチングにもつながっていく。
- 提供できるもの、ことと、必要としている人たちが結びついていない。これは茂原だけに限らず、どこもそうである。少しずつでも、それぞれが必要としている人、提供できる人がもっと交わってくると、いろいろな力が生かされてくることになってくると思う。そのつなぎの部分、市としても考えているのだと思う。
- (事務局 風戸) つなぎに関しては、積極的に取り組んでまいりたい。
- (塚崎委員) 掲示板があれば、「〇〇を求む」「〇〇ができる」と書けると思う。お互いに市民同士でマッチングできるのではないかと。誰かがやらなくてはならないと人が入るのもいいが、自分たちで自ら情報提供して、求めるものをお願いしたいこと、できることの掲示板を作ればいいのではないかと。
- (関谷座長) それには、紙媒体もあれば、電子掲示板や円卓会議などもあり得る。例えば、子ども食堂について、誰がどんなことができるのか共有し、学区に一つ子ども食堂を作ろうという動きになれば、地域まちづくり協議会との接点も出てくると思う。あるいは、自治会として応援できることを持ち寄るなど、いろいろな接点を生み出すためにも、掲示板は有効であると思う。
- 最近、地域の円卓会議がだいぶ盛んになってきている。上下関係もなく、意見交換

を行う場として、みんなで話し合うものである。それを地域単位でどんどんやっていくという動きも出てきている。そこをつなぐ手法・媒体はいろいろある。それを一つでも二つでもうまくプラスしていけると、だいぶ変わってくると思う。

- （高信委員）地域には、集会所がある。話し合える場はたくさんあると思う。
- （西條委員）確かに、みんな集会所を持っている。持っていないところもあるが。
- （高信委員）どこの地域の人でも利用できるようになるとよい。
- （塚崎委員）私たちは、実際に集会所を利用して、100歳体操をやっている。
- （高信委員）テレビでも茂原市が取り上げられることが増えてきており、茂原市に住んでいても知らないことがけっこうある。先日も、田舎寿司を創る教室を募集していた。場所を探すことも大事かもしれないが、まずは自分の家の近くの集会所を使うべき。地域から発信する必要がある。住みやすい生活環境づくりが大切だと思う。
- （牧委員）市民活動団体に認定されると、場所が無料で使えるということが、認定されて初めて分かったが、ほかの人は知らないと思う。個人の人も、グループも、何か活動するにあたって、場所にお金がかかってしまうと、なかなか難しい。認定市民活動団体になると、スケジュールとの兼ね合いになると思うが、市民室も貸してもらえるということがもっとわかってもらえば、積極的に参加してもらえるようになるのではないかな。
- もう一点、市民活動団体の認定要件として、メンバーの過半数が、市内在住在勤在学者というのがある。茂原市で働いている人、通学している人も市民活動団体のメンバーになれるということが、意外と知られていない。
- 人口が減ってきているのは自明のことであるので、市民活動を進めていく上で、茂原市だけでなく、他の地域に住んでいる人も取り組むことが当たり前になってきているので、他の地区の人巻き込んだまちづくりも、今後のマッチングの上で、方向性として盛り込んでいただくと、わかりやすい。茂原市に住んでいないとダメなのではないかと考えていると思う。
- 大切なことは、楽しくないと続かないということである。難しかったり、面倒だったり、暗かったりすると、人は来てくれない。市民活動団体同士が協力して、楽しい企画を実施できたらよいと思う。

- （事務局 風戸）市民室については、本来は使用料金を負担していただくものだが、一般に広く呼びかけて参加していただくような公共的な催しである場合は、生活課で予約して提供している。団体が自分たちだけで集まったり、練習したりする場合には提供は難しい。具体的な企画書等を提出いただいて個別に判断してまいりたい。
- 楽しくないと参加してもらえないというご意見については、3月21日に実施する協働提案事業も、ブース出展に講演会をプラスして楽しみながらという要素を加えたものである。いろいろな団体がイベントを行うときに、他の市民活動団体のブースやセンターの紹介、出張出前相談所なども実施していければと考えている。来年度、センターが立ち上がった暁には、ご提案を踏まえて検討してまいりたい。
- （関谷座長）それに関連して、市外で取り組んでいる方々が、茂原市で活躍したいと申し出てきたときの支援のあり方が重要である。
- 茂原市で自己完結しようとする、枯渇の一途をたどってしまう。そうではなく、外でいろいろ活躍している方々をどう茂原市に引き込むかが重要であり、そのためのきっかけや仕組みが問われてくる。
- 最近だと、例えばふるさと納税などを絡めて、茂原市に寄附してくれた人をもっと掴んで、茂原市のためにもっとどのようなことができるのかを探る。さらなる寄附という可能性もあるかもしれないし、これから茂原市が一体となって取り組もうとすることに参加を呼びかけることもあり得る。
- いずれにしても、外の力を引っ張ってくるという動きをもっと加速させていかないと、茂原市だけでは完結できないという懸念が残る。
- 行政的には難しいかもしれないが、チャレンジしていただきたいのは、広域的な連携である。例えば、この郡域の町村と連携しながら、市民活動を応援していくというフレームを作れないか。どこの市町村でもいいが、協力し合えるところで、まちづくりについての基金を共同で作って、協力し合う地域内で市民活動をどんどん連携・交流して、アイデアを出し合って推進してもらおう。形は問わないが、そのような動きを後押ししていくようなまちづくり基金などがあれば、市民が持っている力がもっと生かされると思う。
- 今は、市の枠組みで応援することに取り組んでいて、それは十分可能性があるが、逆にもっと活動範囲が広い市民活動団体を押しとどめてしまっているという裏の側

面もある。それをどう払しょくしていくかが課題である。

- 行政には区割があるが、市民活動団体には行政の区割にとどまるものではない。いろいろな可能性を持って活動し得る。子ども食堂のネットワークを作ってもいいし、体験事業をつないでいってもいい。いろいろな可能性が膨らみ得る。検討課題に載せておいていただきたい。
- (西條委員) 団体の仕事が非常に錯綜している。例えば、自治会では社会福祉協議会と定期的に話し合いをしているが、以前は自治会から社会福祉協議会に役員を派遣していなかった。3年ほど前から、私が副会長として入り、いろいろな話をしている。自治会と社会福祉協議会では、似たような活動をいろいろとしている。今まではそれぞれで活動しており、自分たちの活動だけしていればよかった。
- 民生委員の人たちは、100数十人の人たちを、手分けしてケアしていた。私たちの自治会にも18名ほどいる。民生委員の人たちが、社会福祉協議会や自治会と一緒にになって取り組んでいる事例もある。これからは、各団体が協力し合いながら取り組んでいかななくてはならない。
- 社会福祉協議会だけで取り組むのではなく、自治会でも取り組み、情報を交換しながらやっていかななくてはならない。地域には、包括支援センターも設置されている。彼らも一生懸命取り組んでいる。助け合いは、できていると思う。
- (関谷座長) 地域ベースで、団体の枠を超えた連携という動きが間違いなく出てきている。そのような流れを捉え、地域を一つの受け皿とするならば、市ではそこと連携し、関係を築いていけばよい。
- 地域包括支援について、茂原市ではどのような動きになっているか。
- (事務局 風戸) 今年の会議でも話題に上ったが、まだ連動できていないのが実情である。地域包括支援センターが市内4か所に設置され、庁舎の中にも地域包括支援室を設置している。それらとの連携はまだ取れていない。
- (関谷座長) おそらく、介護保険法に基づき、地域で連携する組織や会議を開いていかななくてはならないのではないかと。いろいろなところで横の連携が必要になり、横の連携をいくつ作らなくてはならないのかという話になってしまう。
- 各方面で、どの分野でも、地域の横のつながりを作っていくという話になっていると思う。そのようなときに、行政が相変わらず分野別でやっていたら、地域はそれ

をいくつか受ければいいのだという話になってしまう。

- 西條委員のおっしゃるように、地域では、すでに横の連携の動きは始まっている。行政内部の分野別の動きとできるだけ結び付けて、交わるきっかけとして地域の円卓会議をやってみるなど、ゆるやかな動きから模索してみてもどうか。
- 今はまだそれほど浮上してきていないかもしれないが、この 10 年でおそらく行政サイドから地域にやってもらいたいことが、相当噴出してくると思う。今は、役員を一人推薦するだけでも、相当に厳しい状況がある中で、そのような取り組みをやってほしいと言われても、とてもではないが対応できない。ゆるやかな交わりを少しずつ始めながら、分野別の対応ではない動きを組み立てていただけたらと思う。
- (塚崎委員) 自主的に始まった動きであるが、障害者の施設に集まった方たちと、包括支援センターも関わり、3 月 28 日にコミュニティカフェを開こうという話になっている。社会福祉協議会や自治会、私たちのようなボランティア団体や包括支援センターなどが加わり、居場所づくりをしていこうというつながりが生まれ始めている。自分たちができることをやっといこうという話になっており、楽しくなってきた。期待している。
- (西條委員) 社会福祉協議会では、予算が厳しい状況であるが、業務がどんどん増えている。別のところで似たようなことをやっているのだから、一緒に取り組もうと考えている。各団体は、どこかで何らかのつながりがある。高齢者が増えて、具合が悪い人が増えている状況を見ているので、地域の団体に話が伝わっていれば、協力し合えると思う。
- (鈴木委員) 私の地域でも、団地であるが、100 戸くらいの自治会で、ごみ捨てや電球の交換に困っている高齢者がいるという話を聞いている。自治会長が総会において、自治会で困っている人がいるのだが、助けてくれる人がいるかと声をかけたら、20 数人ができると手を挙げたとのことである。平成 30 年度から始めているが、無償ではなく有償のボランティアであり、単価はわからないが、作業によって価格を決めて取り組んでいる。
- (高信委員) ワンコインでお手伝いするというチラシがポストへ投函されていたのを見たことがある。最近、茂原市でも大きな工場がなくなって、暗いかなと思って

いたが、茂原やいすみ、君津にバスで旅行に来るという話を聞いた。茂原公園や藻原寺に行っているようである。茂原も観光面で人寄せすべきと思う。七夕まつりのときは、東京駅に七夕飾りが飾ってあってすごいと思った。いろいろな方面で、みんなが頑張っているのだと感じている。

- 先日、花見のバス旅行に東京から茂原へ来るという話を聞いた。茂原も捨てたものではないと思った。冬の七夕など、他の地域の方から見れば、茂原市はたくさん見どころがあるようである。
- 以前は、「茂原」はどう書くのかと聞かれたこともあったが、今は竜巻などでも記録に残っており、良い面でも悪い面でも有名である。
- 市民室でいろいろな団体から話を聞いたが、これからも茂原市を応援していきたい。頑張ってもらいたい。
- （関谷座長）市民団体に加えて、民間企業や事業者の力も、これからは非常に大きな役割を果たすことになると思う。企業や事業者の地域参加は、ぜひ取り組むべきである。特に、中小企業の方々からは、地域にどうやって入っていけば分からないという声を聞く。まちづくりに活かしてもらいたい人や物、寄附など、いろいろなものがあるが、どう接点を作って関わっていけばいいのかが分からず、団体と関わればいいのか、何らかのプロジェクトがあるのか、よく見えてこない。そのようなことも含めて、情報をうまく共有していただけたら、また違った進め方ができるかもしれない。
- 補助金については、事業者としては入りにくい入口かもしれないので、違う入口を設ければ、すそ野が広がるかもしれない。
- 本日は、それぞれの立場からいろいろなご意見をいただいた。まだまだ課題はあるが、高信委員がおっしゃるように、茂原市ではこれまでの努力が実を結んで、確実に形になってきているように思う。いい流れが出てきているのは間違いのないと思うので、他の自治体と比べても、バランスのいい形で次なる動きが進展しつつあるのではないかと思う。この動きがもっと進展していくように、期待したい。
- （事務局 風戸）いただいたご意見については、事務局として受け止め、できるものから着実に進めてまいりたい。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願いしたい。